

14 『医籍考』による『四庫全書提要』の考証

郭 秀 梅

順天堂大学医学部医史学研究室・

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所

近頃、筆者は『医籍考』の整理・校勘を行った。『医籍考』における『四庫全書提要』（以下『提要』と略す）内容の記録および考証について統計、考察した。その結果を報告しよう。

『医籍考』が『提要』の医学と関連の一九五条内容をほぼ全部収録しただけではなく、考証を行っている。その中に『提要』の誤りが一八条あると示している。しかし、筆者はこの一八条の内には、元胤の誤解や考証の不十分によるものがあることに気づいた。

一八条の内容は（一）成書及び刊刻年代の違い（二）巻数の異同（三）書名及び著者の混乱（四）版本の異同（五）詞意の訓釈の誤りからなる。例をとって挙げ

てみよう。

『医籍考』巻五医經五に「黄帝靈樞經『宋志』九卷。存。」とある。これについて、多紀氏は「提要」では本書の巻数の整合に関する論述が間違っていると指摘している。要点をまとめると、『靈樞』は南宋時代の史崧が始めて整理・校正し、二十四卷本にした。この二十四卷本は一一五五年初めて刊行された。その後の元時代になって、十二卷本の『靈樞』が刊行されたが、同時代の医学者の呂復はこの十二卷本『靈樞』を史崧によつて南宋時代の刊行しれたものと誤解した。『提要』では元代に十二卷本が存在していたことを見落としたうえ、さらに元代の呂復が、明代にも刊行された十二卷本の著者熊宗立の影響を受けたという誤った記述がしているために、後世の嘲笑のもとになった。

多紀氏は文政元年に、元代の至元五年刊行の『靈樞』を入手し、その題に「元作二十四卷、今併為十二卷、計八十一篇」と記していることから元時代に、十二卷本の『靈樞』がすでに存在していたことが裏付けられる。

『医籍考』卷十本草二に「重修政和經史証類備用本草三十卷。存。」とある。

『提要』には、元代の大徳(六年)壬寅(一三〇二)年に刊行した『大観本草』に『本草衍義』を収録したと述べている。しかし、多紀氏が家蔵する大徳壬寅『大観本草』によると、そこに『本草衍義』は収められていない。『提要』の著者の目にした『大観本草』は明代の俗刻本に過ぎなかつただろう。また、清代の学者の錢大昕『十駕齋養新録』に、明代に翻刻された大徳壬寅本『大観本草』を挙げて、大徳六年に刊記を印していない。このことから「提要」が編纂された時期、『大観本草』は中国本土に散佚してしまったことが推測される。

また、洪江全善らの『経籍訪古誌』によると「多紀氏の聿修堂と伊沢氏の酌源堂は元代大徳壬寅宗文書院刊『大観本草』を所蔵している」と記載している。したがって、日本に大徳壬寅『大観本草』が存在していたのは確かである。それは世界的に貴重本である。

『医籍考』の卷四十三の方論二十一の「王氏外台秘要

方『新唐志』四十卷。存。」の項で、『外台秘要』の作者の王焘の略伝について「焘の母に疾有り。年を弥りて帯を廃せず、視して、湯劑を祭す。」と書かれている。『提要』は次のようにいう。「視祭」の二字の意味はよくわからない。しかし、『玉海』(南宋・王应麟)の引用文も同じなので、宋本ですでにこのようになっていたことがわかる。しばらく、このままにしておく。」

これについて、元胤が元簡の弟子辻本松菴の注釈を引用した。『礼記』曲礼に「羹を祭することなかれ」という句があり、後漢の鄭玄の注に「祭は調えることである」、唐の陸德明の『經典釈文』には「祭、塩梅を加えること」とある。故に、「視祭」とは「調理」と解釈すべきであろう。辻本松菴の解釈が中国で一九八〇年出版した『医古文基礎』に採用された。

『医籍考』の優れた成果は『提要』が絶えることなく完全な目録となるために活用されることを期待する。